

令和7年度第2回高砂市総合教育会議 会議録

令和7年10月21日（火）高砂市役所本庁舎301会議室において開会

出席委員

市長	都倉	達殊
教育長	玉野	有彦
委員	吉田	美香
委員	山名	克典
委員	神尾	信作
委員	川本	晃功

出席事務局職員

理事	荻野	章広
総務部総務室総務課長	十倉	正佳

教育部長	木田	匠
教育部教育推進室長	吉金	仙人
教育部学校教育室長	平山	健二
教育部教育推進室教育総務課長	竹内	禎之
教育部教育推進室教育総務課主幹	石原	里美
教育部学校教育室学校教育課長	古門	宜泰

傍聴者

2名

本日の議事

- (1) 新たな学校づくり推進計画策定の検討状況について
- (2) その他

○事務局

失礼します。定刻になりましたので、これより令和7年度第2回高砂市総合教育会議を開会いたします。

まず初めに、市長から御挨拶をお願いいたします。

○都倉達殊市長

皆さん、こんばんは。大変冷え込んでまいりましたけど、お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

本日は、令和7年度第2回目の高砂市総合教育会議の開催に当たり、先ほども申し上げましたように御多忙の折、またお忙しい時間帯での開催のお願いにもかかわらず、お集まりをいただきまして誠にありがとうございます。

改めて、委員の皆様方には平素から高砂市の教育行政、また、高砂市のこどもの健やかな成長に御尽力を賜っておりますことにお礼を申し上げます。皆様方には本日も忌憚のない御議論をいただければと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、本日は新たな学校づくり推進計画策定の検討状況について御協議いただきたく思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

○事務局

ありがとうございました。

本日は、全ての構成員の皆様にご出席いただいております。出席者の御紹介並びに事務局の出席者の紹介につきましては、出席者名簿をもって代えさせていただきます。

それでは、これから議事に入らせていただきます。

高砂市総合教育会議運営要領第4条の規定により、議事進行は市長が行うこととなっておりますので、これからの進行は市長をお願いいたします。どうぞよろしくをお願いいたします。

○都倉達殊市長

それでは、次第に従い、議事を進めてまいります。

「新たな学校づくり推進計画策定の検討状況について」を議題とさせていただきます。

本日、議題は一つですが資料の内容が大きいため、四つのテーマに分けてそれぞれごとに委員の皆様と御協議をさせていただきたいと思っております。なお、会議の時間の都合もありますので、協議はテーマごとに20分程度で区切り、次のテーマに移りたいと考えておりますので、御協力のほどよろしくお願い申し上げます。

それではまず、別冊となっております資料の2ページの「新たな学校づくり推進計画の検討状況」に加えて、本日の一つ目のテーマである資料4ページからの適正規模・適正配置、少人数教育について、教育部より説明をお願いいたします。

○石原里美教育部教育推進室教育総務課主幹

それでは、資料2ページより御説明いたします。

新たな学校づくり推進計画は、地域とともにある学校施設の安全安心を確保し、今後の児童生徒に望ましい教育環境を持続的に提供することを目的としています。

計画の内容は、高砂市における小中学校の適正規模と適正配置の基準、校区再編計画、学校施設の整備基準、おおよそ20年間の各学校におけるロードマップとなります。

この計画の策定に当たり、教育委員会の附属機関である高砂市新たな学校づくり推進審議会において審査、審議がなされます。

次のページをお願いいたします。

計画策定の全体スケジュールです。

令和6年度では、児童生徒数の詳細な将来推計を行うとともに、小中学校を取り巻く現状と課題を把握しました。

令和7年度は、現状課題や第4期高砂市教育振興基本計画、意見交換でいただいた御意見を踏まえ、これから目指すべき学校像を具体化し、実現するための方向性を示す基本方針をまとめていきます。

令和8年度からは、基本方針に基づき、小中学校の再編案及び学校施設の整備基準を検討し、それらを踏まえたロードマップを作成していきます。なお、適宜、市民の御意見を伺い、計画は、令和9年9月末策定を予定しています。

次のページをお願いいたします。

適正規模・適正配置、少人数教育について、審議会における検討状況を御説明します。

次のページをお願いいたします。

こちらは、市全体の児童生徒数・学級数の将来推計のグラフです。

下からピンク色が中学校の生徒数、青色が小学校の児童数で、緑色が児童数と生徒数の合計です。グラフの真ん中が2024年現在で、その右側が将来推計結果です。

高砂市の児童生徒数は1984年をピークに減少し、2024年現在ではピーク時から57%減少、40年後の2064年には現在からさらに半減する予測となっています。

次のページをお願いいたします。

将来推計結果について、表と地図を使って、いつ、どの学校で、どのような状況になるのか整理しました。表の濃いピンク色は国の標準規模の基準を超える19学級以上となる時期、黄色は基準を下回る11学級以下となる時期、赤色は全学年で1学級となる時期です。

下側の地図を御覧ください。丸が小学校、四角が中学校で、数字は普通学級数です。

左側の地図は、令和6年現在で1学級のみ学年がある小学校が2校、11学級以下の中学校が2校存在し、既に小規模化が始まっています。

10年後になりますと、全学年で1学級となる小学校が1校出現し、中学校は4校で11学級以下に、20年後では全学年で1学級となる小学校が3校に増え、ぎりぎりクラス替えができる12学級の小学校も増加するなど市内全域で小規模化が拡大します。

次のページをお願いします。

審議会では、小規模化又は大規模化した場合のメリット・デメリットを整理するとともに、児童生徒数の将来推計やアンケート結果等を踏まえ、小中学校ともに切磋琢磨する環境や多様な意見に触れる機会が必要であるとして、小学校は12から24学級、1学年当たり2から4学級、中学校は12から18学級、1学年当たり4から6学級が適正規模の基準案となりました。

次のページをお願いします。

学校が小規模化すると、学級数の減少に伴い配置される教職員が減ってしまうことから、教職員の1人当たりの負担は増加してしまいます。この表は、少人数教育の手法の一つである1学級当たりの人数を少なくする少人数学級とした場合の市の負担額のシミュレーションです。

左が現在、右が25人学級となった場合の表になります。25人学級となると86人の増員が必要となり、試算では年間6億円弱、市が負担することになります。さらに、教員不足も全国で深刻な課題であることも踏まえ、本計画の適正規模の検討において、1学級当たりの児童生徒数は、35人を前提することになりました。

次のページをお願いいたします。

通学区域、学校配置の状況についてです。過去に組合立学校であった宝殿中学校は市

境に立地し、配置が偏っていること、伊保小学校は分散進学となっていること、特に、市の中央部において小学校が隣接していること、大方昭和の合併時の旧町村をベースとして学校区が設定されていることが特徴となっております。

次のページをお願いします。

それらを踏まえて、審議会における適正配置の基準案は、小学校は通学距離で4キロ以内、通学時間では1時間以内、中学校は通学距離では6キロ以内、通学時間では1時間以内となりました。

ただし、※印にあるとおり、基準内であっても遠距離となる場合には地域の実情を踏まえた負担軽減策を検討するとしています。

説明は、以上となります。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。

資料の説明をいただきました。皆様方の御意見をいただく前に、私のほうから私の考え方を少し述べさせていただきます。

今までも総合教育会議の中でも、私自身は小規模な小中一貫校や義務教育学校になってでも地域コミュニティの維持の観点からしても各地区に小学校は一つ必要ではないかという考えを皆様方にもお話をさせていただいてきておりました。

まず、子どもたちのことを一番目に考える中では、子どもたちの教育環境をどうしていくかということが大切だというふうに考えております。そういう中で、学校が望ましい環境づくりをしていくということが大変重要だというふうにも考えております。

ただいま説明をいただいた中でも、審議会の議論や今後の児童生徒数の推移、大変少人数化になってきております。そういった中で、一定の学校規模は必要でないかということも審議会の中でも意見が出ていることについては、私自身理解をしているところでございます。場合によっては校区を広げていく必要性についても、今後やはり検討していく必要があるのではないかとこのふうにも考えております。

ただ、現在、体育館も小学校、中学校、体育館避難所としての取扱いがされるということがあります。

そういった観点から、やはり市民の災害時のことを考えると、やはり何らかの形でその地域の拠点になる災害拠点、避難所としての考え方も取り入れていかななくてはいけないというふうに考えております。

それと、適正配置については、やはり通学距離、通学時間については審議会でも今議論された中で、国の基準と同じでよいと考えてはおりますけど、地区としてのその距離感ですね。現在の最大距離2.4キロを大きく上回る場合については、当然、今後はやはり配慮が必要になってくるのではないかなというふうに考えております。

高砂市全域で考えると、コンパクトな距離感でありますので、その点はまだまだいろんな形でやっていけるのではないかなというふうに考えております。

以上、今私の考えている内容でございます。これから委員の方々に御意見をいただきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

○山名克典教育委員

いいですか。

○都倉達殊市長

はい、どうぞ。

○山名克典教育委員

この新たな学校づくりの推進計画の中で、結局今先ほど言ったように、この例年ずっとやられてきてる中でね、実態と課題、それを調査して今出てきてる数字あると思うんですけど、その次の項目として目指す教育の姿、論点等への対応策ということが挙がってきて、それで現在になってるんですけども、そうしたときに今市長が言われました考え方、それは得てしてこのハードの分だけを言ってるようなところがあって、結局、僕すごく大事な論点としてしなきゃならないのは、こどもの教育するに当たって、いわゆる小規模にせよ、結局、中規模にせよ、結局こどもの教育環境というのをどんなものを創るかということだと思うんですよ。

だから、今の現在の少人数、あるいはそれなりに中規模であったとしても、今の先生が1人がおって、結局教育をしていくような形じゃなくて、将来の小学校教育、中学校教育の中で、やはり学校教育もこれからはいろんなスタッフの方々が集まった中で学校教育を考えていくような形にしていけないと、学校教育は何も教員だけで行っていくものではないということ、地域の人たちと、ソーシャルワーカーにせよ、理学療法士、あるいは心理の方々、いろんな方々の集まった形で、これはもう以前にも言ったように外国でそういう形の学校教育の仕方、環境を整えることもありますけど、教育実態は、一つの教育、授業するだけじゃなくて授業の在り方にしても、そのほかのケアするに当たって、いわゆる実際には今や病児医療ケア要るもの、そういう形をしたときにはナースの配置とか、そういう総合的な配置でこどもの教育を考えていかなきゃならないので、そうしたときにどういう規模が必要かという、それでどういうふうなスタッフがあって、何年後には今の現在の教室の中での授業の在り方とは違った教育が、あるいは10年では無理かも分からへんけど、20年、30年後には多分形態が変わってくるだろうという。そうしたときに、学校の建替えとか、そんなんを考えたときの今の校舎の在り方、今の校舎の設計みたいな形では駄目だし、いわゆる教室の配置の仕方、あるいは教室の広さ、あるいはそれなりの所属する、いわゆる施設の問題も、いわゆる今言われた避難所としての体育館の在り方とか、そういうのも複合的な考えでしていかなあかんとき、総合的に考えていくのもすごく大事だということ。それは十分分かってんのやけど、ただ一つ、根底にあるのは、やはり教育を将来少人数制にしたとしてもどんな、いわゆるスタッフで教育をするのか。中規模であったとしたらどれぐらいにできるかということを考えていくと、僕はやっぱりある程度の中規模な形を保って、やはり将来20年、30年後には先生が足りない足りないというより、先生だけのスタッフではない、いわゆるほかのいろんな方々が集まって教育を行っていく。それが地域の核になっていくような形で、地域の中核になって結局こどもを育てていくような形の場になってくるという。

そういう、だから、教育のそういう将来に対するビジョンとして長い展望での在り方、どんなんを想定していくかだと思うんです。そういうので学校の創り方、あるいは配置の仕方というのはやっぱり変わってくるので。ただただ人数の問題と距離という形じゃなくて、要はしつこくここに書いてある、何ページかな。3ページに書いてある「目指す教育の姿、論点」、いわゆる教育の姿、これがやっぱり、それから学校像が見える化、方針って、言葉としてはなってるけど具体的にこの議論として、それがどこまで行われているのかというのがすごく伝わってこない。教育のいわゆる場所、人数、距離、いろんなこと言われるのは分かるんやけど。ソフト的というか、在り方と教育の、教室の在り方、学校のクラス、教育の現場というのはどんなことを想定していつてるのかというのが見えてこないの、その辺の市長の考えもちょっとお聞きしたいな思うけど。外国の話と言われることがあったんですけど、確かにそういう、今からは多分変わってくる、建物も要はいろいろ聞いてると、例えば60年、80年もつとしたら、そういうことを考えたら建て方もやっぱり先を見越した、先取りした形の形を創っていつかないと、すぐ

陳腐化したら非常にここは使い勝手の悪い、今のマッチ箱を立ててるような学校舎の造り方というのは、もうこれはナンセンスだろうという、これ絶対無理だろうという形は僕は頭の中にあるんで。その辺の状態を考えとるんですけど。

○都倉達殊市長

先生、すみません。山名委員、ほかのテーマでも、その教育の内容とかいうのは別にまたありますので、今の議論をしていただくのは、やはりこの適正規模・適正配置という内容でお願いしたいという。

○山名克典教育委員

結論としては、だから、僕は。

○都倉達殊市長

少人数学級の。

○山名克典教育委員

だから、中規模の学校にあらうが少人数のあつて、それで、やはりそのいろんなスタッフがおるような形の適正配置、適正な学校経営するためには規模が要る。だから、小さい学校では、先ほど言ったその一つの教室、学校運営の中でこどもたちを教育するに当たってはそれなりのスタッフが必要だということで、小さくなったとき1人の先生が少人数で1学年1人しかおらないような学校になってしまうと、やはりそれなりのスタッフの配置が難しくなつて、いわゆる教員以外の方々の配置は多分不可能になるだろうと思うから、ある程度の規模になつて、それでなおかつ少人数のクラス編成して、その中にいろんなスタッフがおるような形の学校運営をしていかないと教育は充実した教育が行われんないんじゃないか。いわゆる僕の考へてる教育はできないと思つてます。

○都倉達殊市長

はい。ありがとうございます。

7ページにも、審議会の中で適正規模の基準という案としてお示しさせていただいております。その中でも、適正規模の中で小学校であればこのような内容、中学校であればこのような内容で、一定案として基準を決めてることについて御意見をいただきたいというふうに思います。

ほか、御意見ありましたら。今、教育長、手挙げてた。
教育長。

○玉野有彦教育長

多分、山名委員さんは、小学校の規模としては12学級から24学級、中学校は12から18、こんな決まりはあるんやけども、それ以上にもっとよりよい教育をするために、ここからどういうふうな高砂市として展開していくのかというようなことを言われているように思うんです。

例えば、端末があつてその端末をどんなふうに使つたりするのかとか、それとか、いろんなこのこどもの学びたいことがある。例えば農業について学びたい、それとか生き物について学びたい、それから工業について。そういうスペシャルな人を招いていって場所場所でやっていくようなオープンなスペースが要るんじゃないの。そういうふうなことも考へてやっついてはどうかというような提案を受けたと思うんです。

私もそのように思いますが、今回適正な規模としては、このような形でいってはどうか

か。ただ、教員の人数を改めて国の配置以外でもらうとなると、少人数学級をしていくにはちょっと市の負担もあるかなと思うので、それを地域の方々、もうスペシヤルな方々を招き入れながらやっていくことが私はよいかないというふうなことを思っているところです。

○都倉達殊市長

はい。ほかの御意見。
どうぞ。

○神尾信作教育委員

僕の経験上で高砂中学校にも勤務したことがあって、そのときにはまさに小規模校で1学年2クラスずつの全体で6学級という、まさに小規模学校だったんですけども、そのときの僕の感想を言うと、本当に落ちついて、その当時はこんな規模の二、三学級を市内でいっぱい造ったらいいんじゃないのぐらいの感じでおって、非常にいい学校だったと思います。いいというのは、こどもたちにとっても保護者にとっても、教師にとってもという意味ですけれども。

ただ、もっとよくよく考えると、在学中3年間はいいかもしれないけど、それがその先、高校進学とか卒業、進学とか就職とか世の中に出てきたときに果たしてそれでいいのかと思ったときに、やっぱりある程度の摩擦とかいろんな切磋琢磨するような機会がないと、やっぱり成長という部分では物足りないのかなという思いもありました。

いろいろとそんなことを考えると、今ここに小規模校がどんどん増えてくる弊害、デメリットを何とかしましょうということによってこういう話になってると思うんですけども、やはりある程度、適正規模という基準の数値をこうやって付けていただいて、それを基にして再編成していくほうが、やっぱりその中でやっぱりあつれきも出てくるとは思うんですけども、長い今回の計画でも10年後、20年後、40年後という長いスパンで考えていく場合には必要かな、大切なことかなと思います。

小学校の基準は特に、国は12から18というようを一つの指針で出してるんですけども、本市については12から24と広げてますよね。それはこの前やった大々的なアンケート結果だとか高砂市の実情を考えてとか。そういうことのいろんな理由があって、あと他市の基準を見ると、神戸、姫路、明石、加古川等も全部12から18じゃなくて12から24で適正規模にしてるんですね。

ですから、そういうことから考えても高砂市が12から24というふうに小学校基準を設けたのは適切かなと、そんな感じがします。

○都倉達殊市長

ほか。はい。
吉田先生、どうぞ。

○吉田美香教育委員

私はここで審議会が出してくださったこの適正規模というのは、今までの長い学校という制度、明治時代ずっときてる制度の経験を全部積み上げてきた結果、いろんなデータから出してこられた最適解なんだろうなとは思いますが。

ただ、私の個人的な実感として、もうこの10年ぐらいの間にこどもさんすごい変わってるんですね。こどもさんも変わってるし、その背景の御家庭もすごく変わってきて、それこそすごく彩りが増えたという感じが。ですから、一人一人に割とオーダーメイド的に対応していかないと難しいなと感じるようになってきました。

ということは、今までのような規制の何十人という人に対して1人の先生がしゃべるという方法では、もう多分対応できなくなってきた、近い将来、大学のように子どもたちが教室を移動して自分の受けるべき授業を受けていくような形ができてくるのかもしれないし、いろんなパターンが多分この先出てくると思うんですけど、今は想像でしかなくてはっきりしたビジョンというのは描きづらいですね。

ということは、今出してくださったこの最適解に合わせて考えながら、将来にも少し柔軟性を持たせて考えていかないといけないのかなということを考えています。とても難しいことなんですけど。はい。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。ちょっと今のテーマの中では適正規模、エリアの中での適正配置とかそういった内容でちょっと議論をお願いしたいので、今、吉田委員が言われた今いろんな子どもたちの授業の選択とかいうのはまた違うテーマでも出てくると思うので、そのときにもいろいろ御意見いただきたいと思います。

川本委員、何か。

○川本晃功教育委員

冒頭、市長おっしゃってました、今の学校が地域のいろんなものの拠点になってるとおっしゃっていた、まさにそのとおりだと思って、おそらくその防災面であったりとか、子どもを取り巻くその地域コミュニティとの関わりであったりとか、そういうのって本当各エリアエリアですごいものがある程度醸成されていると思うんですね。それが子どもたちに与える影響って今すごく大きくて、時期的に言いますと今の祭りであったりとか、そういったところに子どもたちも参加して地域のことを好きになってもらったりとか。

それとか、やはり今学校では学べないことを学校運営協議会であったり、青少協であったり、そういった人たちが経験させていただいたりとかそういうのがあるので、あくまでもその部分がこの学校を仮に編成するであったり、そういったときに途切れてしまわないような、そういったことは必ず必要なのかなと思うのが1点と。

やはり、適正規模というのを考えたりとかするとき、あくまでこの数字というのは絶対必要だとは思いますが、高砂市がその国の基準と変えて24に変えているのと同じように、高砂のエリアの中でもおそらく地元の方であったり、子どもたちであったり、親御さんであったり、感覚というのはいくらもイコールじゃないと思うんですね。なので、必ずそうなるとは思いますが、もう全てのエリアが同じようにこの型にはまらないのかなと思います。それはもうそうあってしかるべきだと思いますし、そういったところもしっかりケアして計画を立てていただくとというのが一番望ましいのかなと思っております。予算も関係してくることだとは思いますが。市長がおっしゃっていたみたいな学校がもう拠点になっているというのが、本当に身にしみて感じているところなので、その辺り、今のものがなくなってしまうような、そういったふうを考えていただければというのが希望です。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。

35人学級という国が示してきた人数枠、それを考えたときにも、今現在、何ページだったかな。6ページにお示しをしているように各小中学校の今現在の状況、それと10年後、20年後の学級の人数構成が示されていますけど、このとおりになるかどうかは別として、これを想定しながら適正規模・適正配置を進めていく必要があるのかなと

いうふうに私は考えています。

ただ、今川本委員もおっしゃったように、地域によってこの型にはめるのではなく柔軟な対応も考えながらやっていく必要もあるのかなとも思っております。その辺はそれぞれの校区の中でのいろんな協議を踏まえた中で進めていきたいかなというふうに思っております。

このテーマで、教育長から何かございましたら。

○玉野有彦教育長

私は、もう何て言うのかな、ちょっと少ない人数もありなんやけど、ただ、そうじゃなくてよりいろんな価値観に触れるようなことをしてやりたいないうような、いろんな人が集まってきていろんな考えを持っている人と一緒に学べるような場所を考えるというのが大事かなと思っております。そういうことをすることによって、学校というところでこんなことを学んだ、社会に出てこういうふうな価値観でいったらええとか、その価値観と自分の価値観が違ったらどういうふうにしていったら分かってもらえるんやろか、そういうようなことを学ぶ場所であってほしいなということ、できるだけ適正の基準、それから適正の配置というのはこれでいかせてもらおうかなみたいな形で思っています。

ただ、学ばせ方についてはちょっと考えなあかんということ。それを基にしてどのような建物を建てていかなあかんのかというのは今後課題かなというふうなことを思っています。

○都倉達殊市長

ありがとうございました。

それでは、次の本日の二つ目のテーマに移りたいと思っております。

資料の11ページから「連続性のある小中一貫教育について」、また、資料16ページからの「個別最適・協働的な学び、探究的な学びへの対応」について、教育部のほうから御説明をお願いします。

○石原里美教育部教育推進室教育総務課主幹

それでは、「連続性のある小中一貫教育」について、審議会における検討状況を御説明します。12ページをお願いいたします。

市では、第4期高砂市教育振興基本計画において、主要な取組、小中一貫教育の発展、幼児教育の学びの充実と連携を掲げ、進めているところです。

次のページをお願いいたします。

小中一貫教育の制度として、義務教育学校と小中一貫型小学校・中学校があります。義務教育学校は、条例により設置すること、1人の校長、一つの教職員組織であること。標準規模は18から27学級、1学年当たり2から3学級であることなど、小中一貫型小中学校と異なる点があります。

しかし、9年間の教育目標を設定し、9年間の系統性・体系性に配慮がなされている教育課程を編成することはどちらも同じになります。

次のページをお願いいたします。

市では、小中一貫教育の推進に向けた取組として、ブロック一貫教育推進プロジェクトを実施しています。中学校区をブロックとし、ブロックごとにこども園、小中学校の教職員で、右の②の一例のような特色ある取組が進められています。

次のページをお願いいたします。

審議会での議論の結果、今後の方向性の案として、小学校及び中学校の再編に当たっ

ては各々の学校規模を確保した上で、小中一貫教育の推進が図れるよう検討を行う。小学校と中学校を施設分離型で再編検討する場合、施設相互の距離をできるだけ短くなるよう配慮する。再編後も児童生徒数が減少し、学校規模の変化が生じた際には、更なる再編を検討するとなりました。

次のページをお願いいたします。

個別最適・協働的な学び、探究的な学びへの対応として、審議会において協議した概要を説明します。

次のページをお願いいたします。

市では、こどもが主役の学び、ほっとかへん学び、地域とともにある学びを学校教育ビジョンに掲げ、その中の魅力ある授業づくりとして、個別最適・協働的な学び、探究的な学びに力を入れています。

次のページをお願いします。

個別最適な学びでは、ドリルソフトの活用や自由進度学習の導入による自分のペースで学習を進められる環境を整備しています。協働的な学びでは、地域課題や国際テーマをグループで調査発表する学習を実施し、ICT教材も活用しています。

次のページをお願いします。

探究的な学びでは、個別最適・協働的な学びとの融合を図るとともに、高砂STEAM教育の推進と産官学連携体制の構築を進めています。審議会では、他市の事例も踏まえながら、これらの学びに柔軟に対応できる空間づくりや設備が必要であるといった意見が交わされました。

具体的には、来年度、学校の整備基準作成時に検討していきます。

説明は、以上となります。

○都倉達殊市長

ありがとうございました。資料の説明をいただきました。このテーマにつきましても、私からこのテーマについての考えをお伝えしたいと思います。

まず、小中一貫教育についてでありますけど、理想としては教育の連続性、それと中1ギャップの軽減などを考えると、やはり小中の施設の一体化が必要ではないかなと。また、義務教育学校のことができれば一番いいのではないかなというふうにも考えております。

ただ、一方では、やはり現実的なことを考えると施設の一体化というのが大変なかなか難しいなという観点から、やはりできるだけ学校間の距離を少なくして小中一貫の内容にできるだけ近く教育の現場ができたらいかなというふうにも考えております。

それと、次に個別最適な学び、協働的な学び、探究的な学びについてでありますけど、今現在求められているこのような探究的な学びにつきましても、学習の仕方に対応するための施設整備ができれば理想であるというふうには考えております。

国の方針といたしましても、これからの教育の中では多目的に使用できるスペースとかグループ協議がしやすい教室、ICTを効果的に使用できる空間など臨機応変に活用できる施設が必要であるというふうな考え方を国のほうでは方針として出してはおりますけど、なかなか全ての教育現場の中でそういった空間を提供できるというのはなかなか難しいというふうにも考えておりますが、その理想に近づけるような、これから将来に向けてはそういった教育環境を整えていく必要があるとも考えております。

教育大綱のお示しをした中でも、まずこどもたちが主役の学びの中で質の高い教育ができる環境、そういった環境をつくっていききたい。また、二つ目にもこどもたちのニーズに合った教育環境をつくっていききたいということを教育大綱の中でもお示しさせていただいております。

ですから、できるだけこの教育環境をつくるためには、できるだけ学校の再編の中でもそういったことを考えながら進めていく必要があると、今現在は考えておるところでございます。

それでは、委員の方々から御意見を賜りたいと思います。

○山名克典教育委員

いいでしょうか。

○都倉達殊市長

はい。

○山名克典教育委員

今、市長言われたことがもっともな話としてお聞きして、それなりの大綱と言われたようにされているもっともなこと。意見としてはそれで集約されるんですけども、その中で結局、やはり小中一貫に関してのこの教育の中で、今までの高砂で行ってきたことの僕はやっぱり実際はどれだけうまくいってるのか。いわゆる皆さんが児童生徒、あるいは保護者、あるいは教師、先生自体が実際どれだけの満足感、達成感があるのかなという形をね、一回やっぱり検証してみる必要はあるかなと思っています。特に、高砂小学校、中学校に関しては施設一体型でやっている。そうすると非常にうまくいくし、それで少人数だったら地域の中では、やはりうまくいって地域の中で子どもたちの顔も見える、閉鎖的という言葉はあれですけど、その中での子育てもうまくいってるような形と。

それと、それぞれの一つの中学校に小学校が複数校あったりすると、やはり中学校、小学校が離れているとなかなかうまくいかないところ、だから、きついですが、やはりほかの中学校、高砂小学校・中学校に比べて、ほかのところでのいろいろなお話を聞いても一体的な、結局教育そのものが十分行われてるか言うたら、何か不十分じゃないかと、なかなかうまくいってないところがあるんじゃないかなという気はしてるんです。実際にはやられてて、先生方一生懸命やられてるのは努力してて、こうやってます、こうやってますとお聞きしますけど、具体的な形として、あそこはうまくいってるのかな、本当にどうかなという形の疑問がちょっと常に伴ったので、ここは教育長からまたお話があるだろうと思いますから。

そういう意味では、先生方は一生懸命それなりのこの距離が離れ、市長が言われた距離が離れてる学校の中でのスタッフの教師の行き来、あるいは生徒の行き来、児童生徒の行き来、これを協働でやるようなことがなかなか難しいところが現実にあって。

だから、すごくこの掛け声に比べてやってるような形としてるのに、どこまでうまくみんな満足感、達成感があって充実した形で行われているのかなというところはちょっと気になるところです。それはこれからいろいろ考えていかなきゃならないし、それで先ほど言った適正配置の問題で変わってくればいろいろ変わって、審議会の方々もそれなりの状態によっては校区編成とか、それなりの規模でいわゆる再編をしなきゃならない、ここがやっぱりネックだと思います。やっぱりこれがあるから離れてるとやっぱりできないですよという形だと思うんですね。

だから、すごく掛け声だけで倒れたような形にならないようになってほしいと、僕は義務教育の学校に関しても、やっぱりこれも一つの適正配置の中から出てきた問題で、やはり苦肉の策だと思ってるので。だから、そう考えたら一応いろんな問題点あると思います。

それとまた、先ほど言われました適正、協働的な学びに関しては、子どもにおいた教

育の中で今、特別教育、特別支援とかそんなものもありながらそれぞれのこどもたちのニーズに応じた教育をする、提供することは、やはりそれなりのスタッフがあるし、それも学校の中で、多分先ほど話で小規模やったら無理だろうということもある、難しい、地域の中で学校とか企業とかいろんなのが来るに当たっても、学校を横断した形で各複数校が一緒にやるような形の、そういう社会教育的なものもあって、当然もっと積極的にしなきゃならないなという、中学校単位の中で、まず小中一体の中と、さらにもっと今からは横断的に学校を広げた形で、提供してくれるその方々の限定というのがやっぱりありますからね。企業にせよ、それなりのいろんなことを教えていただける、ニーズに対していろいろ提供してくれる方々のスタッフの制限もあるから、難しいかなと。

それと、もう一つ非常に大事なものは、やはり言葉としてはギフテッドとか、そういういろんなことがあって、それは特別しても結局それなりの認めていって、それなりの本当に個人差によって違う教育があるということ。オープンな、いわゆる堅苦しい一辺倒の教育とは違う、いわゆる意識の変革をしないと、いわゆるどれだけ、いわゆるこどものニーズに応じた、今は得てして結局遅れてて、ほっとかない教育という形でそれなりの手を加えてスタッフしていくと、いろいろと市長からも予算付けていただいてしてまずけど、ほっとかへん学びと。それとは別に、今度はやはり能力を伸ばすための協力的な教育も検討していく形になると、やはりまだちょっと難しい問題出てきますけど、やはりそれをどんなふうな形で、その子たちを自由なほうに解放させていってあげるような形。いわゆるその子らに対して授業が学校へ行くことが楽しいという、学校へ行くのがおもしろくないもの、退屈いう形の状態をつくらせないような、やはりそういう場を提供するのも一つのこれからのいわゆる多様性、本当に難しいところだと思うので、ここはもう言い出したら切りがないんですけど。そういうのを検討していただきたいなとは思っています。

○都倉達殊市長

そうですね。探究的な学びの中でも、最近特に臨海部の大手企業の方々がすごい前向きに参画していただいてまして、そういう意味では企業の方々から得る探究的な学びの中での学習は増えてきていると思っています。それだけではないんですけど、やはりこどもたちがいろんな興味を持つことが、まず大事だし、その興味を持った中でもやっぱり一人一人考え方もね、興味の持ち方が違いますから、それを初め吉田委員のほうからもお話ありましたが、選択できるような環境整備ができるのかというのは、一足飛びにはそこまでいかないんですけど、そのいろんな探求的な学びをこどもたちに提供する中で、どこかで自分のやはりやりたいことを見つけていただけるようなきっかけをつくっていくのが今の教育に大切なことかなと思っています。

この内容で、教育長、何かありましたら。

○玉野有彦教育長

私。ありがとうございます。

まず、山名委員おっしゃった多様性ということから。まずはいろんな子がおるという認識をせなあかんということは今思っています。認識をした中で、その子に合った形で進めていく。そのために、まずはみんなが分かるような、できるようなユニバーサルな授業をしていかなあかん。それでも分かりにくい場合、もっと学びたい子らに合わせた学びを提供していかなあかんというようなことを思っています。

そうなってくると、ほんまに今ある教室の中でやるというよりは、少しオープンな多目的なスペースがあるほうがよいかんというようなことを思っています。今、多様性のことはそれでいけますか。それを市長は考えてくださっているというのが、私は聞いてうれしいなというようなことを思いました。

取りあえず、そこまででいいですか。

○都倉達殊市長
では、神尾委員。

○神尾信作教育委員

先ほど、市長さんのほうから継続性とか、中1ギャップの解消、軽減ということから含めて義務教育学校がベストだと思うが、現実的には距離がある、離れてるかもしれないけども小中一貫校というようなお話がありましたけど、私この市長さんがおっしゃったベストとおっしゃった義務教育学校を目指していただけたら。ただ、これは莫大な予算がかかるようなお話じゃないかと。義務教育学校と決めた時点で施設一体型になるのかと思いますので、これはなかなか厳しいと思うんですが、先ほどもお話あったように、ある地区では義務教育学校、ある地区では小中一貫校みたいな形でもいいと思うんですけども、全てがということではないんですけども、それを思ったことの原因、私なりの思いとすれば、先ほど説明にもあった12ページの第4期高砂市教育振興基本計画の1-3-1、小・中一貫教育の発展、その後ろにポツポツと三つあって、学びと育ちをつなげる学習指導と生徒指導の方向性の共有、一つ目。これは理念ですよ。ブロックでの理念を共有しましょう。二つ目が、義務教育9年間の学びと育ちの系統性・連続性。これも小中一貫教育の理念で、三つ目の児童生徒の交流や合同活動の活発化。小学校と中学校が連携した行事や合同活動、交流を行い、児童生徒間のコミュニケーションの機会を増やし、児童生徒の自己肯定感、自己有用感の向上、互いを認め合う豊かな心、非認知能力になるかと思うんですが、図りますというところ3本柱があって、三つ目が施設が離れていると本当にしにくいんですよ。しにくいっていうか、もうできないに等しい。時程自体が全然違いますから。

ですから、やっぱり施設は、一体がベストですけども、できたら隣接まで近づくということになれば可能かなと思いますけども。私が知ってる限りの情報で言うと、本当に今コロナ禍以降、特に子どもたち同士、教師の交流ほとんどできていないような現状ですよ。できていることといえば、例えば、教師が小学校の教師は違うけども授業参観の見学行ったり、あと全国学力学習状況調査の結果の検証を一緒にやったりと。小中合同研修会もやっています。でも、それを足しても年間数日だと思いますし、あと子どもたちの交流に至ってはほとんどなくて、生徒会と児童会がちょっとやっってるかなというぐらいが今現状だと思います。

ですから、この三つ目の大事だと思う児童生徒の肯定感とかね、そこらを育成するところは本当にできていないなと残念に思う。

でも、これは施設が離れている以上、無理だと思うんですよ。ですから、やっぱり隣接までには行けたらなと思うんですが。ちょっと話が長くなって申し訳ないんですが、育みという教育委員会が出してるんですかね。この7年の9月に加東市の藤原教育長さんが寄稿されておられました。その加東市というのは、まさに小中一貫教育を提唱されて、今、加東市三つしか中学校が、附属を入れたら四つになるんですが、三つしかないんですが、公立が。そこでされたことのことをちょっと抜粋して、ちょっとだけ読ませてください。

平成26年12月、2014年ですね。我々の高砂市とほとんど似たような時期だと思うんですが、加東市に小中一貫校を創設すると公表して以来、令和3年4月によりやく第一校目の小中一貫校である東条学園小中学校、東条学園が誕生しました。当校は義務教育学校なんですよ、ここだけね。3校のうち一つだけ義務教育学校なんです。人と関わる機会を増やし、自己有用感や責任感を育み、上級生への憧れと下級生への思いや

りの心の醸成を図っている。これはもう一緒に暮らさないとできないわけですよ。入学式では、9年生が1年生と手をつないで入場しています。新入生の保護者の中には、自分のこどもの8年後の姿が見えるようで感動された方も多いように感じました。まさにここだと思うんですよ。加東市は一つが義務教育学校、あと二つは小中一貫校。ただ、小中一貫校でも隣接型、一体化したところに、もう社学園はこの4月開校して、それから今、滝野学園が今建設中ですよ。そこももう滝野中学校の目の前に建設してあるので、こういうことの例を見ても、やっぱり先ほど申しましたように、義務教育学校、小中一貫校、どちらにしても施設が引付いた、隣接してるようなところの方向性を目指していただけたら。このビジョンとする共通の理念はできたので、今度はあと交流を実際にして、そこで心豊かな子どもたちを育てるのに大きく貢献できるのではないかなと。お金がかかると思うんですけど、思います。

○都倉達殊市長

そうですね。私も考えとして目指すところは、やはり義務教育学校、小中一貫教育、そういったハードとソフトと、やはりうまくかみ合った加東市の市長ともお話ししましたが、あの地域はやはり離れてますからそれを一つにまとめて、やはりそれをすると、今度は通学のスクールバスの問題が出てきます。当然予算も必要になってきますけど、やはり何を第一に考えるかというのが多分教育のビジョンだと思うんですよ。そこをやはり、高砂市でもモデルとしてどこかで義務教育学校ができればなという理想は持っています。そのやはりいろんな事例を参考にして、その中で何を学びが変わってきたのか、そういった事例もやはり研究しながら進めていきたいなというふうに考えます。

○神尾信作教育委員

よろしくお願いします。

○都倉達殊市長

どうぞ。

○吉田美香教育委員

私も同じように、この義務教育学校とかこういう小中一貫に関してはブロックごとの先生方の取組ってすごい素晴らしいなとは思ってるんです。ブロックのそういう活動に関わられてる先生方というのは、すごくいろんな視野も広げていらっしゃいますしね。いろんな意識も広く持っていらっしゃって。

ただ、子どもや保護者にメリットないんですよ、施設が離れてると。結局、保護者の人なんかは全然実感がなくて、その一貫してやってるんですよって言われても、もう一つそれ何をみたいない感じになってしまってるので、そうするとやっぱり子どもたちもやっぱり小学校1年生の子が中3のお兄ちゃんと一緒に登校してこそ、その憧れというのは同じ道通ったりはしてるんですけど湧いてくるのかな。また、中3の子どもでもね、今兄弟がいないですから小さな子どもに触れたことがないという、小さい子怖いという子もいるんですよ。やっぱり小学校の入ったばかりの子ってもう幼稚園児と変わらない感じの子どもたちの世話をするとか、一緒に遊んでいなくても同じ敷地内にいるだけで触れ合いますから、何かそういう子どもたちへのメリットというのは、やっぱり施設が近くないと結局は出てこないの、神尾先生おっしゃってたように、やっぱり私は、時間がかかって、お金かかるのでね、時間がかかっても最終的な目標としては、やっぱり隣同士で一緒の門を歩いていくような感覚、運動会は一緒にできるような。やっぱり小さい子にとっての憧れ、大きい子にとっての何か慈愛というかね。小さい子を守ろう

という自然な気持ちというのが育ってくればなと思いますので、時間かけてでもそういう方向に考えていただければと思います。

○都倉達殊市長

面積的な条件を整えば、そこにできるんですけど、なかなか難しい課題がありますので。はい。ありがとうございます。

川本委員、何かありましたら。

○川本晃功教育委員

今の現状の小中一貫の高砂の中での分離型というところが多いとは思んですけど、先ほど吉田委員もおっしゃってたみたいに、保護者さんであったり子どもたちからすると、あまり実感がないというか。おそらくそういったところであったり、それとか中1ギャップの解消というのが目的の一つであると思うんですけど、果たしてそれが今のシステムになってからどれだけ解消されてるのかというのがなかなか見にくいというところがあるんですけどね。そこも見たいなというところはあります。

ただ、一番効果的というか、効率よく進められるところというのが、多分教職員の皆さんの相互のやり取りというのは、もう、すぐ現場にも反映されるようなことなのかなと思っています。そこも重々、今やり取り頑張ってるのも分かっているので、それをもっともっと進めていただければなと思います。小学校の先生はこの子を中学校こういうふうに育てようとしてるところに目的が見えたところに子どもを送り出すような、また逆に、中学生の先生はこういった考え方、こういったふうに育った子がうちに来るんだよみたいな受入れ体制であったりとか、そういった相互が見えやすくなるようなところっておそらく教職員の先生が、まず一番効果的なのかなと思うので。その辺り、またそれが先生の負担になってしまっただけではちょっと駄目だとは思んですけど、それが教育をしていく上での効果的なものになればいいなと思っているので、まず検証も含めてその辺りに一番注力いただけると、一番実感につながるところなのかなと思っています。

○都倉達殊市長

そうですね。教員の方々の小学校・中学校の情報共有、情報交換、そういったことが大変重要だと思いますね。まず、そういった内容が少しでも進んでいけば、子どもたちへのいろいろな意味での、教育の中で波及が進んでいくのではないかなと思っていますけど。その点で、教育長、何かありましたら。

○玉野有彦教育長

皆さん同じような御意見でよかったかなと思いつつ、一応まとめてくださっているなと思いつつ。何か一貫教育して何かええことがあるからというふうに考えていきたいないうようなことは思っています。自ら問いを立てて考えて、自分で解決していく。自ら学ぶ力が私はこれから要るかなと。

だから、いろんな対立がジレンマがあっても仲間と一緒にいい社会をつかっていく、仲間と学ぶ力が重要なことだと思いつつ、それは小学校6年間とか中学校3年間だけでつくるよりはもっと長いスパンでやっていったほうが、より子どもたちは伸ばせる、子どもたちを伸ばせるかなと思うので、一貫教育を進めたいなと思っています。

それをやるには、神尾先生言われたように、近くでやっていったほうが進めやすい、こどもらは伸ばしやすいということで進めていっているところです。

成果として考えるのは、高砂小中のことを思いつつは言っているんですけども、教職員

の合同で何かをやっていこうという意識が高まります。もう一つ、それを基にして、この地域のこどもらはこんなふう育てたいから地域を巻き込もうぜという意識が先生方に育ちます。そういうことをやっているとこどもは憧れ感を持ったり、ちょっとお兄ちゃん、小さいこどもに優しくなったり、そういうような成果はあります。

ただ、離れていると少ないので、そこを何とかしていかなあかん。でも、離れてるんやけども何とかやらあかんということで、今取組が進められています。

まず管理職から、中学校の先生、小学校の先生2人、こども園の先生2人、5人で管理職をやりながらちょっとでも文化祭に参加できる。こども園のこどもらを連れていこかとか、ちょっとでもトライやるで中学生がこども園に行つてやろうか、小学校に行つてやろうか。何かそういうような意識は、管理職から生まれてきているのは事実です。それをもっと担当とかいうふうに広めていくようにしていきたいなと思つてます。離れてるからと言われると、ちょっと高中なんかしゃくに、高小、高中、しゃくに触るので、そうじゃないやろう。もっと今、ZOOMで先生からの寄り合いできるやろうと思ひながら、もっとこんなふうな授業をしようぜっていう授業感の共有化とか、学習内容はこんなふうにしたいというのをやってもらいたいというように今後進めていくようにしていきたいなと思つています。

○都倉達殊市長

ありがとうございました。

それでは、次のテーマに行かせていただきます。

資料20ページをお願いします。

本日の三つ目のテーマ、「安全・安心、快適に過ごすことができる施設」について、教育部のほうから説明をお願いいたします。

○石原里美教育部教育推進室教育総務課主幹

それでは、「安全・安心、快適に過ごすことができる施設」として、審議会における検討状況を説明します。

次のページをお願いします。

築年別整備状況です。市の小中学校の施設は125棟、延床面積は約13万平米です。このグラフは、横軸に建設年度、縦軸に延床面積を、マス内にどの学校の建物かを表示しています。保有面積の約61%が建築後40年を経過しており、建替えや長寿命化改修の時期を迎えています。

次のページをお願いします。

こちらは、高砂市学校施設等個別施設計画で試算した今後施設を維持・更新するのに必要な40年間の経費を表したグラフです。40年間で約321億円、平均して年間8億円が必要と試算されてはいますが、計画策定後、数年間は不具合対応や劣化対応を実施したものの実績コストとしてはかなり抑えられた結果となりました。

昨年度より不具合対応や修繕等を増やして安全確保に努めていますが、今ある建物全てを改修や建て替えて維持していくには莫大な予算が必要となるため、今後の財政状況を考えると効果的な対応策を検討する必要があります。

次のページをお願いいたします。

給食につきまして、小学校は自校式、中学校は給食センター方式ですが、高砂中学校のみ高砂小学校で調理した給食を運ぶ親子形式です。小学校の給食室は6校で築40年以上が経過、床に大量の水を流して汚れを洗い流す旧来のウェットシステム方式も存在し、運用でカバーしている状況です。

審議会における今後の方向性の案としましては、小学校給食は施設の老朽化対策と学

校給食衛生管理基準への適用を進める。老朽化する小学校の給食室更新に際しては、現在実施している自校方式を整備するが、再編の状況によっては給食センター方式の導入も検討する。中学校給食は、学校給食センターによる配食方式を継続するとなりました。次のページをお願いいたします。

市の学校プールは、全て屋外プールであることから、天候に左右されやすく、施設の老朽化も進行し、今後大きな改修が必要となります。また、水質の管理や施設管理など教員の負担が非常に大きいといった課題があります。

こうした状況を踏まえ、審議会では今後の方向性案として、小学校の水泳指導は、民間プールへの委託化を段階的に進める。中学校の水泳指導については、小学校の委託化の状況を踏まえ検討を行うとなりました。

次のページをお願いします。

特別支援教育につきまして、特別な支援を要する児童生徒数、学級数の推移をグラフで示しております。市では、1980年から特別支援学級を全校に設置しました。児童生徒数は、直近の10年間で約3倍増加しており、今後も増加することが予測されます。次のページをお願いいたします。

特別支援学級は三つの種別がありますが、1クラスの最大人数が8人であり、その人数を超えると1クラス増やす必要があります。また、必要な支援に応じてトイレやシャワーの設置などの対応が必要となります。

こうした状況を踏まえまして、審議会における今後の方向性の案としましては、引き続き特別支援学級等の体制及び環境整備の充実を図るとしています。

次のページをお願いいたします。

不登校支援につきまして、左側は小学校の不登校児童数の推移で、1年生から6年生までの積み上げグラフ、右側は中学校の不登校生徒数の推移で、1年生から3年生までの積み上げグラフです。小学校3年生以降、中学校2年生まで学年が上がるごとに増加しています。また、小学校6年生から中学校1年生への進学時に例年大きく増加していることから、いわゆる中1ギャップに対応できていない子どもがいると考えられます。

次のページをお願いいたします。

昨年度より校内サポートルームを全小中学校に設置しています。しかし、利用する児童生徒が増加しており、部屋のスペースが今後不足する可能性があります。また、休憩する場所や学習に集中する場所といった環境づくりも今後検討が必要です。

審議会における今後の方向性案としましては、サポートルームの環境整備に引き続き取り組み、子どもたちの心の安定を図ることができる学校づくりを進めるとなりました。説明は、以上となります。

○都倉達殊市長

ありがとうございました。資料の説明は、終わりました。このテーマにつきましても私のほうから少し考えを述べさせていただきたいと思います。

まず、学校施設、大変老朽化している状況で、今後早く進めていきたいというふうに考えております。

それから、給食につきましては、小学校では特にアレルギーの問題があるため自校式が適しているというふうに考えた中で、今現在その方向で進めていっております。

また、中学校につきましては現在給食センターでの方式を行っておりますので、特に問題なく運営ができていくというふうに考えております。この前も見学会をさせていただきましたが、たくさんの方々が給食センターのほうに来ていただきまして、報告がありましたので伝えておきます。

それから、プールに関しましてですけど、現在、今説明がありましたように屋外プー

ルということで天候に大きく左右されることが考えられます。また、併せて老朽化が激しく改修に高額な費用がかかるという現実もございますので、大変教師の方々にも負担がかかっている状況であります。他市の事例を考えてみましても、やはり民間プールへの委託が進んでいる状況でありますので、高砂市といたしましても子どもたちへの指導に関しても、今後やはりそういった方向で検討を進めていく必要があるかなというふうに考えております。

それから、特別支援教育についてであります。特別支援教育の教室に在籍する児童生徒数が本当に年々増えておりました。それに伴いまして特別支援教室を作っていく、そのような状況で毎年のように改修を行っている状況でございます。

そういったことを考えますと、やはりこれからもし新しく校舎を建設していく場合には、そういった内容の教室も考えていく必要があるかなというふうに考えております。

そういった特別支援を要する子どもたちの教育環境、そういったことも将来には必要であるというふうに考えております。

それから、不登校支援につきましては、この内容につきましても年々生徒数が増えておりました。現在、全小中学校にサポートルームを設置しておる状況でございます。

ただ、一部の学校におきましては環境に課題があると聞いております。

それから、当然サポートルームの在り方をですね、これからもどういった内容が適しているのかということも考える必要があるというふうにも考えております。

それと、やはりこの不登校対策に関しましては、やはりできるだけ学校に来なさいということではなく、子どもたちの教育環境をどういった形で整えていくかということをもまず第一に考えていく必要があるかなというふうに考えておりますので、やはりいろいろなサポートの仕方を教育委員会と共にこれから協議しながら進めていかせていただきたいというふうに考えております。

それでは、この内容につきまして委員の方々から御意見を賜りたいと思います。

○山名克典教育委員

そうしたら、いいですか。

○都倉達殊市長

はい、どうぞ。

○山名克典教育委員

その設備の築年のやつに関しては、もう老朽化した分に関してはもう本当明らかに早急に新しい修理しなきゃならないことと。実際には建替えをするに当たってはいろいろ諸般のいろんなことを話し合ってきたる適正な配置とか、そんなことから考えて教室の在り方、今先ほど市長が言われた教育環境の整備ということを考えると、いわゆる学校の在り方というもの、教室の在り方いうのをもっと考えて、先を見越した学校建設、学校を建設するに当たっての大きな長い目でのビジョンを持った形で学校建設をしていただきたいということ。これはもう理解していただいていると思うので、十分それでお願いいたします。

それと、給食に関しましてはこれは非常に難しく、今言われたアレルギーに関しては各学校で対応しなきゃならないこと、対応されてることもありますので非常に満足しています。

ただ、やはり消毒の方法とこの最近は言われませんが、食器類のいわゆる老朽化、あるいはあると思うんで、やはりそれぞれの備品の結局古くなったものに関する買換え等は、やっぱりそれなりの食に関する安全のためにはやっぱりためらわず新しい

冷蔵庫とか、あるいはいろんなこともやはりいろいろ建設して遅れることなく対応していただければと思います。これはよろしく願いいたします。

それと、プールに関しましては、僕の一つの考えとしては前からもお話ししてますように、小学校・中学校でのプールは要らないだろうという、ゆくゆくは要らなくて、いわゆる市である程度の大きいプール、例えば民間であったって公立であったってしたら、その中で年間を通じてのプール教育、水泳教育するなら水泳教育をしていくような形の方が、いわゆる夏に集中した水泳教室、日焼けの問題とかあるし、本当にその時期だけにすると、やはり学校の授業内容のスケジュールにもやっぱり問題があるというような形あるので、このプールイコール水泳教育、それといわゆる災害時、いわゆる遭難時、いわゆる水難ですね。そういうときのいろいろ着衣水泳とかいろんなことも考えて、やはり年間を通じてやはりしていくような形にするためには、何らかの民間、取りあえずは民間のプールを利用する。それにきちんとした水泳指導員、あるいはそれなりの消防、あるいはそれなりの海難を探知する方々の本当に専門的な教育を受けていけるようなシステムを創ってやっていく必要があるんで、できればメインになるプールを作っていたら、そこで年間通じて使用していけるような形を創っていただいたらいいなと思っています。

それと、特別支援学級に関しては、実際僕はもう教育支援に関していろいろ関わらせていただいて、本当にこれだけすごく増えてまして、審議会、検討会ももうすごく、今年も150人を超える形の対象者があって、やはり日数も増やしていったところで、それでするとやはり何で増えたかというのは別として、結局それに対しての教室、あるいはそれなりの中での対応の仕方、学校の中で先ほどのスタッフの、いわゆる学校の先生方の、いわゆる特別支援の先生方いろいろそれなりの研修を受けてこられた方々とは別に、また別の中の行く行くの、これも先行の、いわゆる理想の話としての心理の先生とか、そういう形の方が関わられるような特別支援というのがあってしかるべき。それでソーシャルワーカーがいて、いわゆる小学校、中学校、中学校から高校へ行くに当たって、結局それなりのいわゆる今後の対応に対するアドバイスできるような形、そういうサポート体制もやはりつくっていただきたいなということを考えております。確かに部屋がどんどんどんどん足らなくて、県のほうもなかなか認めてくれなくて、どちらがもう本当に腹立つのは知的情緒、それどっちになります、知的です言うのに、もうそれは部屋つくれませんから情緒のほうでどうでしょうかと。何てこと言うてくるんだということもあたりするんで、やはりきちんとした、やはり審議して、それにしたことに対して、それで市のほうからもいわゆる教室を今の本当にできるだけあの子たちが開放的になるような形で、部屋そのものがやはりどうしても今の教室行ったら、行く行くこれから話変わりますけどLEDの電気つけていただけることでなると、やっぱり明るくなると思うので、結局今の暗い部屋におると何かこどもたちがやはり行動も、逆に明る過ぎて嫌がる子もいますけど、それは別として部屋の、それなりの教室の改造等、改築等、今進めていただいていることですのでありがたいと思っています。

それと、不登校に関しては、特に僕はすごく市長今一言触れていただきまして、一部のところでは環境が劣悪なところがあるという形で言われたんやと思うんですけども、やはり部屋が暗い部屋、狭い部屋にすると不登校のこどもたちの心理の状態というのは閉鎖的なところに入られると、やはり無理やり入れられると困るんで、ただそれを今不登校に対する先生方の対応の仕方に関してはやっぱりすごくギャップがあって、結局こどもに対していかにもその教室に来たら、そのこどもを見守るという形で、何かいかにも監視して、その子たちが勉強するのをじっと見守っているような形。そういう不登校教室は要らないんだという。やはり不登校に対しての対応の姿勢が全然、いわゆる考え方がちょっと違うんじゃないかという感があるので、やはりそこはもう一回きちんと

教育長言って、やはり部屋ももっと明るい形のオープンな形でできるなら、極端な形はいろんなところで出てきているようなフリースクールの形のオープンな、いわゆる校庭にもいつも出ていけるという形のフリーな教室というのがあってしかるべきであるだろうと思う。いわゆるそれが学校内のある一部の階段の横の部屋に閉じ込めて、そこへ行きなさい。そしたらますます自分の教室よりも行きにくいし、保健室登校までしてた子までも行かなくなっていくという形ありますので、やはりサテライトの構造みたいにもっとね、明るいいわゆる教育環境、その子たちにとって、いわゆる開放的になってプレッシャーのかからないスペースを提供しなきゃならないのに、一切言葉悪い、語彙が少ないんで僕はもう率直に言いますけど、狭い部屋に暗い部屋に閉じ込めるような形、そこに出てこい、出てこいというような形の不登校対応はやめてほしいと。絶対これだけやってほしくない。これは余計に学校行かなくなりますし、先生の資質にもよりますからね。その子によっては、やはりあえて努力してきたときに言葉遣いが非常に悪い、おったりすると、またそこで崩れたりする。やはりそれが本当に難しいところあるので、これは本当にどこまで不登校に関しての、教育長に聞きたいんですけど、不登校に関してのそれぞれの専門的な対応の仕方、心理学的な形の中で研修された方が対応しているのか。やはりちょっと教えてほしいんですよ。やはりいろいろやられと思うけど、ちょっと不適切じゃないですかねという方もおられると僕は認識している。これやっばりちょっと改善せなあかんかなと思ってる。どうか分かりませんが、想像ですから具体的に誰どうのこうのいうのはないですけどね。はい。誤解を招かないようにしてください。

○都倉達殊市長

教育長のほうに、不登校対策について。

○玉野有彦教育長

そうですね。先ほども言われたように、暗い部屋とかいうんじゃないで、もっと明るくて活動しやすい場所におきたいというのはやまやまです。ただ、ほかのこどもたちとの動線をどう分けるかいうのもあるので、その辺でちょっと暗い部屋になりがちかもしれないけど中は明るく、掲示もちゃんとしていきたいなというようなことを思っています。それをしていくのに支援員の資質というのか、そんなに悪い人がおったんかな思いますが。たとえを言うただけで、そういう人はおれへんと思うんやけど、よりいいようにしていくために、やっばりその人らの研修とか、いいところを見せるというのを先進的にやってるといふところを見せるというのは大事ななというふうなことを思うので、そんなふうな形で取り組んでいきたいなというふうなことを思っているところですが、あまりしゃべり過ぎたらあかんね。はい。

○都倉達殊市長

山名委員からおっしゃった照明の関係、それも早急にLED化に向けて進めていきたいなというふうに考えております。

神尾委員。

○神尾信作教育委員

三つお願いしようと思ってます。

まず一つは、21ページ、22ページの施設状況からですが、自分が勤務しておったり、あとは勤務後、外から眺めたりする中で、老朽化が本当に激しいなと思ってたんですが、数値化すると保有面積の61%は築40年と。どのぐらい使えるのという話をこの間聞いたら60年とか、うまく改修すれば80年とか延命できるんですかね。でも4

0年というというのはもう大概だと思うんですけど、下に書いてあるようにいつ何が起ってもおかしくないような状況にあるんだなということを改めて実感しました。

ですから、安心・安全のためにも改修作業なんか本当に必要だなと思うのと一緒に、その次の22ページを見ると40年間に321億円、年間約8億円とかいう数字が出てきますと、これが例えばさっきの話に戻ってしまうんですけども、新しい学校を建設すればその改修費は少なくともなくなるので、年間8億円が新しい学校を造る、例えば義務教育学校を造るときにどれくらいの役に立つか、それは私よく分かりませんが、少なくとも新しく建てれば改修費はしばらくは要らないのかなと。その辺もうまく考えてはいらっしゃると思うんですが、そちらのほうに向けていただけないのかなと思ったり、感じたりしました。これが一点目です。

二つ目は、プールについてですが、これはもうもちろん安全面もありますし、実際にネットとかいろんなニュースでもやけどしたとか、もちろん溺れるだとか、いろんな命に関わるようなこともありますので、本当に安心・安全のことを考えていかないといけないし、私中学校しかよく知りませんが、プールがあって日陰がほんまにないんですよ、もう。一応あるんですけど屋根は。本当にかわいらしい屋根で。生徒が1クラスも入れるようなサイズではないので、日陰がないところでずっとやっているとということで最近の猛暑を考えるとやっぱりなかなか安全は確保できてないなと思ったりします。

当然、補助員が入っていただく、民間に委託するということが教師の負担の軽減にもつながりますし、安全面もひよっとしたら向上するかもしれないなと思っておりますので、ぜひお願いしたいなと思っております。

それから、三つ目は、もう先ほどからサポートルームの件でいろいろ御意見出ております。私も同じようなことを考えてます。本当に空き教室はだんだんクラスが減ってたくさんあることはあるんですけども、そこがやっぱりサポートルームに使われているというのが現実ですね。その中でも一番いい動線を考えて各学校がそれなりの場所をいろいろ考えた中でベストのところを使っているとは思うんですけども。

ただ、もともとが教室のところだとかを使っているの、なかなか望むような形にはなっていないというのが現状だと思いますので、これも山名委員からありましたように、新しく学校を造った場合にはそういうこともしっかり考えた動線とか環境を考えた場所、日当たりとかを考えた場所をもちろん考えていただけたらいいと思うんですけども、でも今現在できることを精いっぱい、先ほど市長さんおっしゃったように照明をさっとするとかできることをやっていただけたらうれしいなと思います。

あと、絶対数がだんだん足らなくなってくると思うんですね。指導員というか補助員の。ですから、その辺の人員の確保もしていただけたらなと思っております。

以上、よろしく申し上げます。

○都倉達殊市長
吉田委員。

○吉田美香教育委員

まず、施設状況、これは本当に手遅れにならないように、お金かかるんですけども手遅れにならないように。それと子どもたちがやっぱり割と危険な場所で自分たち勉強してるんだというようなことをね、1回聞いたことあるんですよ。それって何か自分たち大事にされてないという感じすごくすると思うんですね。こんなところで勉強させられてるというようなことを言われたことがあって。ですから、やっぱり子どもの自尊感情にとってもこれは響くことだなと思いました。ですから、できるだけもちろん、できるだけしかできないんですけども、何かあってからでは遅いのでよろしくお願ひしたい

と思います。

あと、サポートルームとかね、やっぱりあそこがあったから今の自分があるって言うてくれる子もいるわけです。だからやっぱりすごい大事な場所なんだなと思ってるので、やっぱりこどもの気持ちになって大切に大切にその気持ちをくむ場所という思いで対応してもらいたいなと思います。ちょっとした何か机の前の貼ってあるものとか、そういうものでも気持ちがぱっと変わったりするのでね。

それとあと、特別支援教室にしても本当に感謝されてるお母様方いらっしゃるんですよ。あそこがあって、あそこだからこの子行けたというような。だから、そういうふうに言っただけのようなものであってほしいなと思いますので、引き続きそちらのほうもよろしくお願ひしたいと思います。

○都倉達殊市長
川本委員。

○川本晃功教育委員

私も皆さんおっしゃってることと重複するんですけど、修繕費等多々かかるのは重々分かるんですが、先ほども吉田委員おっしゃってましたけど、上から物が落ちてきてからでは遅いと思うので、もうそこでもし、まだそこに着手できないのであれば、もう立入禁止区域にするであるとか。もう本当にこどもに危なくないような措置というのを、まず第一にさせていただけたらと思いますので。そこら辺だけよろしくお願ひします。

○都倉達殊市長

大きな事故につながらないように、市としても早急に手を加えていかせていただきたいというふうに考えております。

サポートルームの御意見もたくさん出ましたけど、やはりそういった生徒さんが増えている現状がある中で、やはり適切に対応していきたいなというふうに考えております。

○山名克典教育委員
ちょっとだけいいですか。

○都倉達殊市長
はい。どうぞ。

○山名克典教育委員

学校訪問したときに、サポートルームに入ったときに、そのサポートルームにおるこどもたちには笑顔がなかったことがあるんですよ。これはあかんぞという感じですがすごく痛感しまして、やはりオープンで、やはりせっかく学校へ来てサポートルームにおったとしたら、にこやかにみんな迎えてくれればよかったんですけど、みんながもうこういう感じでうつ伏せで、これ何なのって思ってね、記憶ありますね。もうすごく大変な思いして、僕もすごくそこからすごく痛くて痛くて、僕このサポート、こういう感じでこどもがサポートルームせっかく来てんのに、笑顔と僕らに対しての挨拶もしないしいう形で、これは普通の教室でも、確かにせっかくね、学校へ登校できて一生懸命頑張ってる子、それを笑顔にしていく、そういう盛り立てていく。その子をサポートするためのことで、それがサポートやからね。部屋に学校に来させただけでノルマ果たしてるというような形でね、サポートルームがあったら駄目なんで。笑顔がないこどもが学校におったってあかんよ、それはね。と思うんで強く言いますけど。

○玉野有彦教育長

はい。しゃべります。覚えてますかという声があったように、一緒に行ったときにそういうふうな状況があった。それを何年か前やと思うんですが、ちょっと個別で指導させていただいて、壁に絵を貼るとか、それとか机の向きを変えとかいうような指導をさせてもらったように思いますが、その辺でやっぱりそのサポートルームというのは、先生言われるように笑顔をもってこどもが来て、できたら教室に復帰いうようなところになればなというふうなことを思います。

それと、こどもが選択して今日はこっち、こどもが選択して今日は教室みたいな感じで進めていきたいな。校内サポートルームの場所はいただいたので、それをどうこうこどものよりどころとか居場所にしていくかというのが私の仕事かなというふうに思っています。

ただ、そのサポートルーム中心というんじゃなくて、他の教育センター中心じゃなくて、やっぱり行きたくなる学校というのをつくっていくというのが大事なことかなと私は思っています。不登校対策というんじゃなくて、全てのこどもに対して行きやすい場所、おりやすい場所にしていくのが令和8年度の仕事かなというふうなことを思っています。ポジティブな支援をしたり、みんなが分かるユニバーサルな学びをしたりしながらしていきたいなというふうなことを思っているところです。

同じく、特別支援も同じようなことやと思うんです。そこが活動拠点になってこどもらが交流学級に行ったりとか、いろんなところに出向いていくような場所になればな。それがほかのこどもたちの耕しになってくると思うんですけどね。

○山名克典教育委員

ちょっとね、ごめんなさい。

○玉野有彦教育長

要らんこと言うた。

○山名克典教育委員

うん。特別支援学級的な形の対象の子と不登校で出てきてるこどもたちの、いわゆる言葉として悪いけど、いわゆる疾患と言っではいけないですけども知的なレベル発達遅滞とか、あるいはその情緒の問題とか、そういう形のあるこどもたちの接し方の問題と、心の病気としてある不登校のこどもに対する接し方は、明らかに違うんですよ。やはりより慎重にしなければならぬし、日々の結局こどもの安心感を与えるための問題、それなりの信頼、いわゆる自分は期待されている、いわゆる肯定させてくれる。いわゆるそれなりの知的なものと別に悪くないんか、結構その言っただけ、その悩み、いろんなこと何か分からない、ケース・バイ・ケースで本当百人百様だから、結局その心の悩みに入っていけるサポートをしないと。だから、環境を提供しただけじゃとてもじゃあかん。だから、それをつくりました、やっています、これでいいでしょうでは駄目だと思います。だからその結局ここ、だから特別支援は、結局それ一人一人に対しての教育として日常の教育の中で立ち合っている、個別で対応しよるんや、その子のレベルにより。ほしたら不登校に来られた方に対しての個別対応をどうするかいったときに、1人の指導員がおって10人、20人を見てという形は無理ですよ。そこで結局、心理の先生なり、あるいはその方々が対応、一人一人に結局アタック、コンタクトしてあげて、そのコンタクト、実際のサポートルームでの中の結局アタック、いわゆるそれなりの子とは関わりがないのは駄目。だから、それは、箱はつくったけど何にも心

が入ってない、教育が行われてないと一緒やと僕は思うから、だから、そこは充実せなあかんと思うんです。

○都倉達殊市長
教育長。

○玉野有彦教育長
私がちょっと要らんことを、言い方が悪かったかなと思いながら。その不登校のこどもたちには専門的に関わるような知識とか技能が要る。特別支援、特別な支援の要るこどもについても専門的な知識が、技能が要る。そういうふうな人らの配置をしていただいてますが、より高めていきたいと思うのと、もっと専門的な人を呼んでしていく、人を増やしてほしいということ、もう言うてよろしいですか。市長に。

○山名克典教育委員
それでね、僕、ごめんなさい、ごめんなさいね。結局、学校全体として1人の不登校の子に関してサポートルームが入ってきたらいいけども、学校へ来ればいいけども、それこそ取り残さない授業という形で、その子に対して常にコンタクト持ってあげて家庭の中いうか、親にもいわゆる積極的にアタックして本当にふだん来ている子よりも積極的にアタックしていかないと改善は進まない。ということは、何ぼでも数増えてくる。だから、増えるのは学校全体、それで改善しないのは結局、改善するのはその子の状況もありますけど、ある日突然に行ける、いわゆる何かきっかけがあって学校行けるようになった子といういっぱいおるんですけど、なかなか進まないのは、学校の関わりの仕方、それなりのあくまで結局積極的な関わりをどれだけやってたのかないということが反映するからね。言葉きついですけどね。

○玉野有彦教育長
いやいや、全然。

○山名克典教育委員
そうだと思います。

○玉野有彦教育長
そういうふうな学校づくりが今からは大事やでということ、山名先生は言われとんやなど。もうちょっと教育委員会にもこないして議論が沸いてますので。

○都倉達殊市長
はい。はい。

○山名克典教育委員
ごめんなさい。時間、余分なことを。

○玉野有彦教育長
またスクールアシスタントも中学校には欲しいなというふうなことも、あと付け加えさせていただきます。お願いします。

○都倉達殊市長

それでは、最後のテーマになりますけど、「地域とともにある学校の推進」について、教育部のほうから説明をお願いします。

○石原里美教育部教育推進室教育総務課主幹

地域とともにある学校の推進として、審議会における検討状況を御説明します。

次のページをお願いします。

部活動の地域展開につきましては、令和5年度から検討委員会を設置して実証実験などを進めてまいりました。

今後の方向性の案としまして、令和10年度をめどに部活動の地域展開を進めます。

地域展開による学校施設利用の在り方として、例えば、施設の利用方法や教職員に負担のかからない施設開放の在り方、セキュリティの確保などの様々な課題についてどのように対応するか検討を進めるとなりました。

次のページをお願いいたします。

学校運営協議会についてです。令和7年1月から法律に基づいた全国型の学校運営協議会を設置し、授業サポート、イベント補助、クラブ活動などが行われています。

今後の方向性案としましては、学校運営協議会の活動がより活発化されることが見込まれるため、活動拠点となるスペースの充実を図るとしています。

次のページをお願いします。

最後に、他の公共施設等の複合化、共用化についてです。

市では、全部で約29.7万平米の公共施設を保有していますが、そのうち学校施設は45%と最も多くの割合を占めています。

今後の方向性の案としましては、他施設との複合化を検討する。学校で対応し切れない部分、例えば、施設管理等を地域に移管したり、逆に地域に必要な機能を学校で提供したりするなど、お互いにメリットを感じられる複合化の組合せについて検討する。

そして、他施設と複合化を行う場合には、区画や動線を分け、学校の安全管理に留意するとなりました。

説明は、以上です。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。このテーマにつきましても、私のほうから少し考え方を述べさせていただきたいと思えます。

まず、部活動の地域展開でございます。今現在、教育委員会のほうで進めておられて、令和10年4月からを目指して今進めておるところでございますけど、なかなかいろんな課題が残っております。

ただ、やはり生徒たちのことを考えて、やはりこれは、内容も含めてですけど、早急に進めていく必要があるというふうに考えております。

また、説明にもありましたように、学校施設の中でのセキュリティ、これに関してもどういった形で室内の展開をしていく中で利用が可能なのかどうか。そういったところも、今教育委員会とその内容のしていただける協議体のところと今いろんな話をさせていただいております。

それから、学校運営協議会については、本当に地域の方々にいろんな形で御協力をいただきながら今進めておるところでございますけど、やはり、学校運営協議会を通じてやはり地域の連携、そういったことも今後将来に向けては大変重要な協議体であるというふうに認識をしておりますので、やはりこれは参画していただいている方々、それと市、教育委員会だけに任せるのではなく、市としてもやはりこの活動は重要なことだと考えておりますので、地域全体で、市全体で進めていくように考えております。

それから、最後に複合化・共用化についてでありますけど、説明にありましたように、学校教育が45%を占めている。一番最初のテーマにもありましたように、学校の適正配置・適正規模、そういった中でもやはり学校の校舎だけではなく、いろんな施設との複合化をこれから将来に向けては考えていく必要もあるというふうな認識を持っております。

ただ、こういった内容が適切かどうか、やはりそれは地域にもいろんな状況が全て一緒じゃないという状況がありますので、やはりそういった中でも地域のコミュニティの中で、そういった複合化の意味、それとこういった内容にまとめられるのかというのは、将来に向けて地域の方々との中でもいろんな御相談をしながら進めていきたいというふうに考えております。

私からは、以上でございます。また委員の中から御意見をいただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○山名克典教育委員

決まってるじゃないんですが。すみません。口火切らなあかんのかなと思っただけで。

部活動の地域展開に関しては、今非常にいろんなところに団体、いわゆる受けてくれるところいろいろ探していただいているので、もう間近に迫ってきましてので非常に地域展開にしていくというのは大変だなと。本当はかなり市自体が、やはりもうちょっと積極的に教育委員会だけでなく市自体が本腰をして、前にも言いましたように市長がそれなりのやっぱり人を配置して、やはり人を口説いていく、いわゆるクラブ活動、スポーツしてる方々を指導員として入れていただくためには、やっぱり積極的にアタックしていく、それなりのものが必要なと思います。

それと、この前うちで問題になったのは、いわゆるDBSの結局子どもたち、この指導するに当たっての性的な形のいわゆることに関して、いわゆる性的虐待、あるいは性的な犯罪を犯した方々、要するにスポーツ、これからの指導員してくれる方々のやっぱり人に対してのそういうチェック、人格ですよ。やはりすごく大事で、今学校の先生方が今いろいろもうマスコミが一生懸命取り上げていろんなことをされてますけど、やはり教員も当然は大変なんです。これが部活動が地域に行ったとき、やはりその子を指導するに当たっての指導員のそういう形もやはりきちんと、いわゆるお願いする以上は丸投げじゃなくて、やはりチェックできるような形、いわゆる積極的にこういうのを注意してくださいという形をやっぱりある程度言っていっとかないと、教育委員会放ったんかいとか言われても困る。だから、今度クラブそういうふうになることに関しては、やはり今テーマとしては性的なそういうこともありますのでね。やはりしていかなあかん。

それと、今言われました施設のセキュリティの問題とかあったとき、いわゆる複合化になったときの問題もセキュリティであって、昔はいわゆる校内暴力があったときとか、そういうときに対してこどもの監視をするためにカメラを置きたいとか、不審者がこどもが乗り越えてきて学校内でたばこ吸うとか、そういうために監視カメラを置きたい、校内暴力するための、今はそうじゃなくて、いわゆる結局将来的に、結局部活動なったら教室を開放するとか、あるいはそのほかもっと複合化になったときは、やはり市長さんが言われましたように分けてするときには、きちんとしたそれなりの、いわゆる日本も安全な国じゃなくなってきよるから、そういうための監視カメラというのはやっぱり必要だと思うし、それなりの動線のきちんとした遮断できるような形というのは当然必要なと思います。それはいろいろこれからやっていただけるものとして思ってます。

それと、複合化でもう一つあるのが、体育館がいわゆる学校が施設がこれだけのパーセンテージ、45%あるから避難所がそうなるんですけど、実際にはすごく前も気にな

ったのがクーラーとか、避難所になったときクーラーがなかったら暑かったとき大変やということもありましたけど、今はすごく問題になっているのは、災害時のトイレの問題でありますよね。だから、トイレそのもの、今まで既存のトイレそのもの、今トイレを洋式化どんどん進んでいただいておりますけど、それとは別に、体育館の僕の一つの本当試案ですけれども、学校の体育館の横なんか、いわゆる一つのそういうの昔の溜めるような形のね、いわゆるマンホールついてていいんですけど、結局マンホールに小さいマンホールを1個ずつ施設、いわゆるいざなったらそこに簡易便所を置いて、簡易の洋式便所みたいなものを置いて、そのマンホールを開けてそこにトイレしていくような、そういう災害時のときの仮設便所をきちんとできる。それが嫌だったら、プレハブみたいなもので覆うみたいな形で屋外でできるようなね。そんなんが造ってるところあって見てて、これはやっぱりいいなと思って、一つの思い付きですけどね。そういうのも複合化するとき、いわゆる避難所とかするときなったら、まず一番そのトイレ造るの、やはり何か工事する、トイレのあれと一緒に浄化槽のこととかいろんなことがあったとしたら考えていただきたいという、簡易トイレの設置いうのもあってもいいかなと思っています。ほんとささいな気持ち。

○都倉達殊市長

災害時の連携協定は、いろいろ結んでおりましてね。リースで対応できる部分もあるので。ただ、体育館の中のトイレ洋式化とかそういった面は、早くやらなくてはいけないという認識でありますので、整備してまいります。

神尾委員。

○神尾信作教育委員

部活動の地域展開が随分気になっているんですが、先日、2028年4月に完全移行という形のこれからの予定等も発表されました。1か月ぐらい前でしたかね、神戸新聞に神戸新聞社が兵庫県内の全41市町にいつ移行しますか、展開しますかというアンケートがあって、その一覧表が載ってるんですけども、その時点で未定というのが7市町ですかね。我々と同じように28年度展開というところが5校、高砂、三木、加東、養父、南あわじ市。それ以外は26年、27年にするという事なんです。

何が言いたいかというと、別に遅いからあかんとか早いからよいとかいうそういう話ではなくて、高砂市については、あえて分かっているながら遅めの取組をしているのかなというふうに感じてますけれども、そのメリットも多分多くからちょっと遅ればせながら行くというところでのメリットもあるから、それを十分生かしてやってほしいなと思ってます。

先日、市外、他市、隣接の市町等に乗入れができるようなところがあるというふうな僕聞いて、それまでのイメージは、校区はもちろん乗り越えるねんけども、高砂市の中、加古川市の中、姫路市の中で展開するのかと僕勝手に思ってただけども、そうじゃなくて隣接の市町もできるんだったら、それはそれこそ遅れたことに起きたメリットかなと思って。ちょっと幅がそれができるのであればね。当然、本市だけが思ってるんじゃないじゃなくて隣の市町にも聞かなあかんのでしょうかけども、ちょっと枠が広がるなど。特に、高砂市のように規模の小さいところであると、やっぱり隣の市との市町との連携というのはすごく大事なことかなと思いますので、そんなことができるんだたらいいなと思ったりしたんですけども、そういう遅れながらスタートするなりのメリットを十分共有というか感受というかしていけたらいいのかなと思っています。

あともう一つは、学校運営協議会ですけれども、これ本当にだんだん今我々がやっている新たな学校づくり再編成とか、今言った部活動の地域展開、いろいろなことを含め

て本当にますます学校運営協議会の存在価値というか価値観が高まってくるなど感じて
いますので、そこは本当にしっかり運営していけたらより市の教育にうまく作用するの
かなと思っています。

以上です。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。
吉田委員、ありますか。

○吉田美香教育委員

私も部活動の地域展開については、なかなかこれ広報してくださってるんでしょうけ
れども、保護者さん、それから子どもたちに分かりづらい状況なんですよね。で、とて
も不安を感じていらっしゃいます。まず学校から部活動が切り離される、なくなるとい
うこと自体、やはり皆さん信じられないみたいなんですよ。もう絶対にあるべきものみ
たいに思ってるので。ですから、まずその部分から本当になくなるんだとい
うこと、それから、どういう形になるとか何かそういうことにいっぱい不安を感じてら
っしゃるようなので、どういう形ででもいいんですけれども何か皆さんに分かるような
広報が必要かなと感じています。やっぱり子どもたちにそういう不安は持たせたくないで
すからね。

それと、学校運営協議会については、今やっぱり校長先生のやり方メインでずっと進
んでると思うんですけれども、あんまりそればかりでもちょっとしんどいかなと少
し感じています。ですから、やっぱり先生によってやり方が余りに違い過ぎると委員の
方たちも戸惑いがあったりとかいろいろするので、ある程度何かもうぼちぼちある程度
足並みそろえるとか、こういうことは取り組んでもらいたいとかいうことも提起してい
ってもいいのかなという時期に来たかなと感じています。

それと、施設の複合化に関してはですけれども、やはり施設って一旦造ると80年ぐ
らい使うじゃないですか。それも考えて、今はまだそんなに複合化必要じゃないと思
うんですよね。そこそこ人数いますし。それが将来一つの建物にいろんなものが多分入
っていかないと、もう人手がなくて機能しなくなると思いますので、そういう時期まで見
越してということなのでとてもいろんなことを想定しながら造っていかなくちゃいけ
ないと思いますから、無駄にならないようによく熟慮していただきながら造っていただ
ければかなと思っています。

以上です。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。部活動の広報に関して不安を抱いておられる方がおられると
いうのは、また教育部のほうからいろいろそれぞれに広報したいと思っております。
川本委員、何かありますか。

○川本晃功教育委員

私も部活動の地域展開の件なんですけど、やはり従来の部活動がもうなくなるという
ことで、競技志向であったり技術向上を目的に部活動をされている方からしたら、ど
うしようかなという部分も当然あると思います。

ただ、ちょっと見方を変えると、やはり地域クラブにいろいろ募集をかけてすること
によって、全く頭の中にもなかったそういったクラブというものに出会うチャンスでも
あると思うんです。なので、そういったところをしっかりと高砂市として生徒たちにP

Rしていく。こんなあるよ、どんどんどんどん参加してねというふうな働きかけを、ぜひしていただきたいと思っています。

あと、その競技志向の受け皿といった部分で頑張っていただけのクラブというのもあると思うんで、そういったところが本当たくさん説明会とかに来られてたと思います。なので、興味はすごく皆さん持っていて前向きに考えていただいているんですけども、そこに関して、例えば、設備面であつたりとかそういったサポートの部分をごままで市として、してもらえるのかという不安というのもすごく皆さん持ってたようで、そういったところ、セキュリティ面であつたりとか予算面であつたりとか当然あるとは思いますが、もう令和10年というともうすぐそこなので、令和10年度にそれが確定されましたでは、こどもさんとか親御さんとかのちょっと準備がもう足りないと思うんですね。なので、もう本当に一刻も早く、もうこれは駄目、ここまではできませんといったところを提示して差し上げるというのが大切なかなと思っています。

それと、学校運営協議会ですかね。こちらに関しましても各エリアエリアで学校運営協議会活動されてるとは思うんですけど、もしできたら各エリアの情報共有ができるような場というのも会長さん集まってとかという場は数回あるのはあるんですけど、そういったところが見える化すると、委員さんの、例えば、ぱっと思いつくようなイメージアップ、イメージアップとかイメージしやすくなったりとかということにもつながると思うので、そういったところも市でまとめて取り上げていただくとかするようなことをお願いできたらなと思っています。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。教育長のほうから部活動の地域展開、それと学校運営協議会でちょっといろいろ御意見出ましたので、ちょっとまとめてお考えを。

○玉野有彦教育長

私が言うと、もう市長にもお願いせなあかんのでちょっと心苦しいんですが、まず、セキュリティの面については、ちょっといろいろ意見をいただいています。もう動線をどうするかとか、それとかどの部分まで使えるのかとかいうようなことをいただいたり、それをもうちょっと設備補強、整備をお願いしたいかなというようなことを思っています。

それから、本当に地域展開もそうやし、学校運営協議会もそうやし、もう少し分かるように言葉で説明するようなことが必要かなというふうなことは思っています。学校運営協議会についても、もうちょっと認知をしてもらえるようなことが必要かなというように、こういう活動してるんやでというようなことを広げるような場が要るなというようなことを思ったりして、今後の活動やなと思っています。

ただ、その部活動につきましては、やっぱり説明会を今後考えておるので、小学校区か中学校区か何らかの形で親御さんたちに進めていくようなことを考えていかなければいけないかなというようなことを思っておるところです。

ただ、これについては市長と共にというようなことを、地域とともにじゃなくて市長と共にというような形でいろんなことを提案させていただきたいということをおもっています。どうぞよろしくお願いたします。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。

それでは、時間も大分経過してきておりますので、議題の2でその他として委員の方々からほかに何かございましたら。このテーマとは別にありましたら、お願いしたい

と思いますけど。

○吉田美香教育委員
いいですか。

○都倉達殊市長
どうぞ。

○吉田美香教育委員
阿弥陀こども園が出来上がりましたけれども、何かあの場所で、コウノトリの飛んでくるあの場所で、経政神社もありますし、琵琶の名手の。何かあそこで記念イベントみたいなのがないのかなと思って期待しています。

○都倉達殊市長
イベント。

○吉田美香教育委員
イベント。

○都倉達殊市長
こども園の中で。

○吉田美香教育委員
こども園のホールがちょうど見えますよね。あの高御位の側から。あの場所ってすごく素敵だなと思うんですけども、何か企画されてることってないのかなと思って。

○都倉達殊市長
ちょっと具体的には聞いてないですけど。明日稲刈り行きますけど。

○吉田美香教育委員
ああ、そうでしたか。

○都倉達殊市長
またちょっと教育のほうから、健康こども部のほうから、また。こども園だけじゃないんですけどね。小学校近いしね。地域のいろんな活性化のために何かできたらなと思いますね。

○吉田美香教育委員
そうですね。

○山名克典教育委員
いいですか。ちょっと。

○都倉達殊市長
はい。

○山名克典教育委員

児童学園の建替えに関してはどんなふうを考えられてるんですかね。建替え、いわゆる児童学園が本当に古い建物になって、それで実際それに対してどんなふうにする、前の、僕はもう個人的には、近くの幼稚園なんか潰れるとき、あそこに児童学園行ったらええなとか思ったりしとったんですけど、そういうのもかなわずやったし。児童学園が県の関係もありますけど、児童学園のあれは老朽化した分に関しては考えていただきたいなと思ったんですけど。

○都倉達殊市長

ちょっと庁内でもいろいろ、そういうことについては今どういった形でできるかというのは、はい。向こうとの関係もありますから。

○山名克典教育委員

はい。よろしくお願いします。

○都倉達殊市長

ほかないようでしたら、本日の予定しておりました議事は終わりたいと思っております。

それでは、進行を事務局のほうにお願いいたします。

○事務局

本日の議題は、全て終了しました。

これもちまして、令和7年度第2回高砂市総合教育会議を閉会いたします。長時間どうもありがとうございました。

○都倉達殊市長

どうもありがとうございました。